GENIUS LOCI: OOMORI 大森の地霊 vol.18

大森・シネマ・パラダイス

大森には、人のいとなみが土地の記憶（地霊）として残っています。今回は、大森のまちを「映画」を通して見ていきます。（文=山田智士　地図・撮影=たかだあや）

日本映画の夜明け

映画は、写真の技術をもとにした欧米各国での研究によって19世紀の終わりに花開いた新しい芸術である。日本で初めての映画の上映は、一八九六（明治29）年、神戸においてといわれる。このとき用いられたのは、電球の父としても知られるアメリカのトーマス＝エジソンが発明した「キネトスコープ」という映写機だった。箱をのぞきこむとその中に動画が見られるものだったという。今日我々がイメージする映画により近くなるのは、フランスのリュミエール兄弟が作り出した「シネマトグラフ」で、これによりスクリーンでの上映が可能となった。これも一八九七（明治30）年には日本に紹介されている。日清戦争が終わり、産業革命が押し進められていたころ、日本における映画の歴史がこうして幕を開けた。

初期の映画はいわゆる〈無声映画〉であり、映像解説をする弁士がいたことが知られる。これが「トーキー」（talkie）といわれる〈発声映画〉になったのは昭和初期のこと。現在の蒲田駅東口のアロマスクエアに、一九二〇（大正9）年から一九三六（昭和11）年まであった「松竹キネマ蒲田撮影所」において、日本初の本格的トーキー映画『ダムと女房』（監督＝五所平之助、出演＝田中絹代ほか）が一九三〇（昭和6）年に制作された。蒲田撮影所は、存在した16年間に千二百本もの映画を撮影といわれているが、町工場の騒音がトーキー映画の撮影に支障をきたすようになったことなどから、神奈川県の大船へ移転した。

このトーキー映画の誕生は新たな俳優やジャンルの登場のきっかけとなり、日本の映画界に黄金時代をもたらす。しかし、相次ぐ戦争による打撃は大きく、日本映画が息を吹き返すのは、一九五二（昭和27）年のGHQによる映画検閲の廃止を待たねばならなかった。

大森の映画館

かつては日本全国の街角に多くの映画館があった。月村吉治著『蒲田撮影所とその附近』（自費出版）には、大森の旧東海道沿いに映画館が増えていく様子と変遷が記されている。

「映画館として古いところで、『大森豊年館』がある。開館は明治四十年代といわれているが確証がない。美原通りは大森劇場の近くに建設された。〈中略〉昭和五年十二月三十一日より日活直営となり、『大森日活館』と改称、戦時中は『東亜館』と改称したが戦災で廃館となっている」

このほかにも馬込銀座などに映画館があったという。また、松竹蒲田撮影所があった大正末から昭和初期にかけては俳優や撮影技師などの映画関係者が蒲田から池上、大森にかけて多く住み、〈流行は蒲田から〉と言われるほど最先端の文化が息づいていた。馬込文士村の最盛期と重なるのも興味深い。

さて、昭和20年代末から30年代にかけ、日本の映画界は第二の黄金時代を迎える。「松竹」「東宝」「日活」「大映」「東映」といった大手の制作・配給会社が新作を敷いたことから、邦画の年間制作本数は一九六〇（昭和35）年に五四七本というピークを記録した。しかし、またも逆風が吹く。一九六四（昭和39）年の東京五輪開催による家庭用テレビの加速的な普及にともなって、映画の年間観客動員は減り続けた。一九五八（昭和33）年の約11億人から、わずか5年で約5億人に半減。高度成長のもとで進んだレジャーの多様化もそれに拍車をかけたのだろう。これ以降、日本映画界は長い不調に陥る。そして、街角の映画館もだんだんとその役割を終えていったのである。

日本初のシネコン？ ～キネカ大森～

そんな暗黒時代に好転の兆しが見えてくるのは平成初期。減少の一途だった映画館数が増加に転じる。その立役者〈シネマコンプレックス〉は一般に5スクリーン以上を有し、配給会社も固定しない。外資の力を借りながらも独自の進化をとげ、今日の邦画復活に至る力の源となった。

そのはしりとなる施設が一九八四（昭和59）年、大森に誕生した。駅東口の「西友」にある『キネカ大森』だ。スクリーンは3つと少なめだが、総合スーパーに併設されるなど、現在の〈シネコン〉に通ずる部分は多い。日本初の本格的シネコンの誕生は一九九三（平成5）年の『ワーナー・マイカル・シネマズ海老名』（神奈川県）開業を待たねばならないが、『キネカ大森』は日本映画界が未来を見出そうとしていた頃の貴重な産物といえる。また、10年ほど前からは積極的にアジア映画を上映し、ファンには有名な存在となっている。

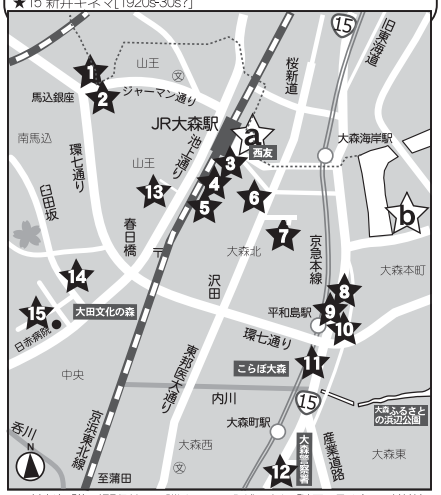
二〇〇二（平成14）年には、7つのスクリーンを持つ『平和島シネマサンシャイン』がB-GFUN平和島にオープンした。シネコンの快適なシートに身を任せながら、一世紀に及ぶ大森の街と映画のかかわりに思いを馳せてみるのもおもしろい。■

〈参考文献・資料〉
・大田区立郷土博物館『博物館ノート復刻版 №61～150』
・「港町キネマ通り」http://www.cinema-st.com/index.html
・月村吉治『蒲田撮影所とその附近』1972
・城戸昇編『わが町あれこれ』5号（1995.6.25）

「取材協力」キネカ大森様、珈琲亭ルアン様、カプセルホテルみづほ様

映画館が青春だった頃

☆a キネカ大森[1984-]　☆b 平和島シネマサンシャイン[2002-]
★1 都キネマ[1920s-30s?]　★2 山王映画劇場?[1930s-50s?]
★3 白木映画劇場[1937-50s?]　★4 ヒカリ座[1950s-?]
★5 大森みづほ劇場[1950s-?]　周辺に大竹（大森?）松竹座も?[1950s-?]
★6 中央劇場[1950s前半-?]→大森第一劇場[1950s後半-?]
★7 大森キネマ[1924-31:洋画系→マキノ・帝キネ系]
　→大森新興館[1932-戦災で廃館]※定員498名
★8 大森豊年館[1900s後半-29]→大森日活館[1930-]
　→東亜館[戦時中-戦災で廃館]※定員570名、2階建
★9 偕楽座[1901-15:芝居小屋]→大森劇場[1916 40s?:天活直営]
★10 ?[1950s?]
★11 大森演芸館[1920s]→大森会館[1924-戦災で廃館:東亜キネマ系]
★12 大森寿館[1920-25:市川百々之助作品]
　→大森電気館[1926-?:帝キネ系特約]※定員350名
★13 ?[1930s-50s?]　★14 ?[1930s-50s?]
★15 新井キネマ[1920s-30s?]



▼月村吉治『蒲田撮影所とその附近』1972の記述、また『地図に見る大田区(1)(2)(3)』大田区教育委員会、1988-90に掲載された地図を元に作成。
現存する映画館＝☆、それ以外＝★。[年代]は営業が確認できる幅を示した。
中原行夫様ウェブサイト『「思い出の映画」の部屋』http://homepage1.nifty.com/y_nakahara/eiga.html に掲載された「昭和32年の映画館」記事によるとこの他に「大森東宝映劇」「ハリウッド劇場」「美原映画劇場」「美原松栄映劇」「大森名画座」など場所が不明な映画館がまだ多数見られる。

▲キネカ大森、初のシネコン?

かつての「大森みづほ劇場」のビル屋上に映画看板の枠が今も残る。

まちあるき 小ネタ ⑱ 街角で見守る人

◆商売繁盛じゃ!

投稿：北千束 A.T.さん

（つづく）小ネタの場所はウェブ［www.oomori-cafe.com］でこっそり公開。

2面のご案内

ひとのいとなみ

現地で感じとることのできる地霊（ゲニウス＝ロキ）。大森というまちをかたちづくってきた、ひとのいとなみに迫ります。あわせて、読者の目線からの「口コミの紙面化」もめざします。

バックナンバーはウェブで！
17号○2008年10月
発車オーライ！バスと大森
［大森の路線バスの歴史］
16号○2008年4月
海苔の記憶、海苔の記録。
［大森の海苔を後世に伝える試み］
15号●2008年1月
伝説の社交場
［馬込温泉がもたらした憩い］
14号●2007年10月
祭りの灯はいまもお美しく
［美原通りのにぎわい］
www.oomori-cafe.com

大森・暮らしの歳時記② —— 海苔採り

小林清親『大森新乃海』1880（明治13）年、木版画より

海苔の最盛期は冬。11～3月、海中に立てたヒビと呼ばれた道具に付着した海苔を、冷たい海から素手で採ります。戦後、縄を編んだ網ヒビが普及。潮の満ち引きに関係なく安定して海苔が採れるようになり、生産量が上がりました。

寛文九年創業
海苔の松尾
大田区大森東1-6-3
TEL 03-3762-0656
営 10:00～19:30
休 不定期

大田区西の不動産賃貸業■
株式会社やよい建物
東京都大田区仲池上1-10-3
TEL 03-5700-1685
Yayoi BLDG. Co.,Ltd.
私たちは大森まちづくりカフェを応援しています。
最新物件情報はホームページへ
http://www.yayoi-bldg.com/
やよい建物　検索

Kobayashi DENTAL CLINIC
シカさんも大森まちづくりカフェを応援しています
ホームページも見てね！
しかのはいしゃ　検索
http://shikanohaisha.com/
医療法人社団 裕歯会
小林デンタルクリニック
歯科医師/小林 裕明
大田区大森北4-22-18 明善幼稚園向かい
TEL 03-3768-0648
受付時間 9:30～12:30 14:30～18:30 休 土日祝
保険医療取扱
はいしゃ

おかげさまでパン部門3周年

珈琲豆と手作りパン 大和屋
〒 大田区大森西4-12-9　東邦医大通り「大森西4丁目」バス停そば
TEL&FAX 03-3298-8988 営 8:00～20:00 休 日祝